

# 笠木さん作詞 フォーク歌い継ぐ



笠木透さんが作詞した「反戦僧侶」を歌い継ぐ佐竹哲さん(岐阜県養老町)

## ギター僧侶 反戦唱え



日中戦争への反対を唱えて逮捕された岐阜県垂井町の僧侶をモチーフに、昨年十二月に亡くなったフォークシンガー笠木透さん(岐阜県岩村町(現・惠那市)出身)が作詞した曲がある。二〇一二年発表の「反戦僧侶」。今年には戦後七十年。生前の笠木さんに「曲を好きなように使っていていい」と託された岐阜県養老町の僧侶、佐竹哲さん(宝巴)は「きな臭い空気が漂う今、この曲が必要」とギターを手に歌い継いでいく。(大垣支局・柳原大騎)

歌になったのは、垂井町の真宗大谷派明泉寺の住職だった竹中彰元(一八六七―一九四五年)。彰元は一九三七(昭和十二)年七月に日中戦争が始まると、「戦争は罪悪である」「自分は侵略のように考える」と批判。その年の十月、当時の陸軍刑法の造言飛語罪で逮捕され、禁錮四月、執行猶予三年の有罪判決を受けた。真宗大谷派からは僧位を最下位に下げられた。

一方で、真宗大谷派が彰元の名譽回復をした翌二〇〇八年から、地元の大垣教区の僧侶らは十月の命日に合わせ、「彰元さんのつどい」を開催。一二年のつどいにあたり、佐竹さんが笠木さんに出演を依頼したところ、「彰元さんの曲を作って、つどいで披露したい」と提案されたという。

へたつた一人で 国に立ち向かった あなたはの思いは 平和憲法に実った

そんな歌詞に、曲をつけることになったのは、笠木さんと親交のあったフォークシンガー増田康記さん

(六巴)岐阜県郡上市。「戦争に再び向かっていきそうな雰囲気の中、世にしっかりと送り出さなければ」。詩を見て、自然に浮かんだというメロディーは、どこか寂しげだ。

こうしてできあがった「反戦僧侶」は、一二年十月のつどいで披露された。体調が既に悪かった笠木さんは、歌詞に込めた思いを紹介。笠木さんに代わり増田さんが歌った。

「とても力強く、聴きながら涙が出そうになった。彰元さんと笠木さんが時を超えて一つになった」と感じた佐竹さん。この曲を彰元さんのテーマソングに決め、笠木さんが亡くなる直前の一四年のつどいで、参加者と合唱した。

日中戦争の契機となった三十七年七月七日の盧溝橋事件から七十八年の節目を控えた二日、岐阜県大垣市のJR大垣駅前で、安全保障関連法案に反対する音楽集會が開かれる。

実行委員会のメンバーでもある佐竹さんは、仲間の僧侶とともに「反戦僧侶」を歌う。笠木さんは、多くの人に歌ってもらうためにこの曲を贈ってくれたはず。反戦を願った二人の思いを、つないでいくつもりだ。



かさぎ・とおる 1937(昭和12)年生まれ。69年から3年間、岐阜県中津川市で、国内初の規模野外音楽祭「中津川フォークジャンボリー」(全日本フォークジャンボリー)を企画運営。社会派シンガーとして全国で公演。東日本大震災後は、福島第一原発事故への怒りを歌った。代表曲に「私の子どもたちへ」「わが大地のうた」など。昨年12月、直腸がんのため77歳で死去。

### 反戦僧侶

詩 笠木透  
曲 増田康記

時代の流れを 押し止めたいのか  
腕を組んだような 伊吹山が立っていた  
75年前の 濃尾平野の小さな町  
日中戦争で 国はゆれていた

日の丸をより ノボリを立てて  
軍歌をうたい 行列が行く  
出征兵士を 東海道線の  
垂井の駅まで 送って行く

灯明台で 休憩したとき  
僧侶だった 竹中彰元さん  
思いつめたように みんなに言った  
わしはこう思う 戦争は罪悪である

造言飛語罪で 警察に逮捕され  
留置場に ほりり込まれた  
本山からも 処分されたうえ  
非国民と のしられた

間違ったことは 間違っていると  
はつきり言った 竹中彰元さん  
たった一人で 国に立ち向かった  
あなたの思いは 平和憲法に実った

時代の流れに 言いたいことがあるのか  
首をかしげたような 伊吹山が立っている  
75年たった 濃尾平野の小さな町  
憲法九条は 今もゆれている

時代の流れに 言いたいことがあるのか  
首をかしげたような 伊吹山が立っている